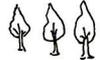


いずみのひろば



「しるし」のさししめすもの

ヨハネによる福音書 20章31節



『これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである。』

今日の聖書の中に「しるし」ということばがあります。そこで「しるし」ということばについて考えてみたいと思います。私たちは、ふだんの生活の中で、いろんなものにしるしをつけています。たとえば、自分の持ち物に名前をつけるとか、教会学校にきたら、最初に朝シールをはります。礼拝に出たということがわかるようにです。また、「感謝のしるしにプレゼントを贈る」というように気持ちを形にします。献金のお祈りで、「感謝のしるしとしておささげします」とお祈りをします。

ところで聖書の中で、「しるし」と言う言葉が使われた場合、新約聖書では、イエスさまが行われた奇跡のことを言います。奇跡というのは、ふつうの人間ではできないこと、常識では考えられないことが起こったときにそれは奇跡だといえます。イエスさまが最初に行った奇跡はカナの結婚式で、水をぶどう酒に変えたことです。その他イエスさまは、目が生まれながら見え

なかった人を見えるようにしたり、死んだ人をよみがえらしたり、いろんな奇跡をされたと言われています。

そういった奇跡のわざというのは、人を信じさせることもできるけれど、逆にそのことで信じていけないという場合もあります。教会の礼拝にいられた求道者の中で、「聖書に奇跡の記述がなければ信じられるのに、そのことがひっかかって信じられない」ということばを聞いたことがあります。先週、トマスが「復活されたイエスさまの十字架の傷に手を入れなければ決して信じていけない」というお話を学びました。

今日の聖書のことばは、イエスが神の子キリストであること、信じるために書かれた。聖書が書かれた目的がはっきりと示されています。言い換えれば、聖書を読めば、イエスのことがわかるということです。聖書は、分厚い本で、読むのが大変で、いろんなことがたくさん書いてあって、むずかしいと思っているのではないのでしょうか。ただ、聖書はどのページをひらいてもイエスさまを指し示しているということを覚えてこれからも聖書を読んでいきたいと思えます。

(お話 林部 弘先生)

